

令和元年十一月吉日初版作成

愛は光の自分になった時

その姿を現わす

高嶋 善三郎

目次

- 眞実の愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 愛は感情を純化し、光となる・・・・・・・・・・・・・ 4
- 小我の想念から大我の光へ・・・・・・・・・・・・・ 5
- 愛は光の自分になった時その姿を現わす・・・・・・・・・・・・・ 5
- (付記)
- 宇宙神の分身としての意識を取り戻す・・・・・・・・・・・・・ 6

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

真実の愛

愛を深めるためにこの肉体界に降りて来たことはわかりましたが、愛を深めるにはどうしたらよいのか、もう少し具体的に教えてください。愛の行為をしているつもりが、怒りとなったり、憎しみになったり、嫉妬になったりなど、把われになったり、宗教で習った愛に把われぬように「放つても」冷淡な自分になってしまいます。

この問に対する答えを整理するうえで、参考になる五井先生のお言葉をみてみましょう。

五井先生は『愛すること』97ページの中で

「真実の愛というものは、縦には神との繋がり、横には、小生命と小生命のつながり、というように、生命と生命が交流しあうことである。(愛とは分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となる。)お互いの欲望と欲望が通じ合ったり、肉体と肉体が一つになったりすることではない。

人間が神の真意にそむいて、神との交流も横の人類愛の心もまたないで、自分達だけの生活の中にひきこもろうとすることは、神にみんなの恩返しもしないことであり、神の大生命からもしだいに離れ、人類の生命体から離れてゆくことで、その死後の生活がいかに淋しい孤独

なものであるかは想像に難くない。」と言われています。

そして、愛の本質について次のように解説されています。

「生命は愛によっていきいきと生きるのである。

真実に愛し合っている男女がいきいきとしてくるのも二つの生命が交流し合って強い力となってくるからである。愛とは欲望を満足させるためのものではない。生命と生命が交流し合って、お互いの心が満足し合うのである。そしてその結果が肉体的に結ばれてゆく。

親子の愛でも、恋愛でも、常に相手の本心が開かれるように、相手の人がもっている生命がいきいきと輝くように、そういう心づかいが必要なので、自分の生命を相手のなかに生かし切ってゆく、ということが本質なのである。

自分が喜ぼうとする前に相手を喜ばせようとする、そしてその相手の本質を生かし、相手の生命をいきいきとさせ、相手の人格が自ずと立派になってゆく、ということとまでくるわけなのである。」と。

そして執着と愛との違いについて説明され、それをどのようにしたら愛の行為にしていられるのかを教えてくださいます。

「子供でも夫でも妻でも恋人でも、愛していると、常にその人のことが気がかりになり、いつも思っていないければいられなくなる。これが執着になってゆく。愛する人のことを思い続けるのは当然なのであるけれど、いつもいつも執着していると、相手の生命をあべこべに縛ってしまうことになって、相手の運命を駄目にしてしまったらすることがある。だから、思われて思われて仕方がなかったら、その想いを、

誰々さんの天命が完ついたりしますように、某さんの生命がいきいきと輝いていますように、というふう祈り言にしましてよ。それならいくら想っても。相手の生命を縛ることはならない。相手のためになることになる。執着の想いを常に祈り言にかえてしまうことが非常に善いことになる。

子供や近親の人が病気になるったりしている場合、どうしてもその病気に把われてしまう。愛するがあまりの執着になるわけである。この時も世界平和の祈りをして、この子の天命が完つされますように、と祈り続けているとよいのである。執着する想いのマイナスが祈りによってプラスになり、その子の病状に良い結果をもたらすことになる。」と。

以上から整理すると、真実の愛を行っていくには、常に縦には神との繋がり、横には、小生命と小生命のつながり、というように、生命と生命が交流しあうことであると言えます。

愛は感情を純化し、光となる

では、何故真実の愛が、円滑に行われないのか考えてみましょう。愛は光そのものであるから、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一種である情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。それは、電流は眼に見えなくとも流れているのだが、電球という器を通さないとその光がわからないようなもので、

本来の光を肉体界の波長に合わせ、肉体界に流れてきて、光本来の役目を果たしてゆくことが、この地球界における愛の働き方なのである。しかしそのことを理解していないため、愛が感情の波に蔽われてしまい、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまうのです。愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたるときには、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かすのです。

愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまうのは、なんなのでしょ
うか。

これについて、五井先生は、肉体に降りてきた魂が光である自分を忘れ、肉体の心、即ち眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心の自分しか認めようとしなくなった。そのため生命の分裂から起こる、不安恐怖、恨みや嫉妬などの世界を創り出し、輪廻転生の流れ（貧老病死の苦界）の中に落ち込んでしまい、感情を光に純化する力を失ったといわれているのです。

この力を取り戻す方法を『人間と真実の生き方』通して私たちに教えてくたさっているのです。

そのみ教えの要点は、分別する心をもったままでいいから、統一により本心（光である自分）の中に入っていくなさい。本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たさ

れている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくと言われているのである。

小我の想念から大我の光へ

ところで光の自分をとりもどす上で、思考上最も大きな障壁になるのが、「自分を赦す」ことなのであります。人間と真実の生き方』の中にも「自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛す、」という文言があります。五井先生は、自分を愛するという事より、自分を赦すことを先に示されています。

これには、大きな意味が隠されているのです。統一により、不安恐怖から解放されてきますが、どうしても解放されにくい最後のものがあります。それは「自分を責める」ということなのです。

これは、小我の想念を手放し、大我の光に入っていく時に起こる現象つまり通過儀礼なのです。小我の想念では、本来本心由来の善業の想念と本来本心から離れた悪業の想念の区別ける分別心が働き続けるのですが、大我の光では、分別心そのものがない世界、「平和な心、すべてを自ら自身と観ずる心」の世界になるからです。分別心が光となって変容してゆく時、自分を責める想いとなって現れてくるのです。これを通過儀礼として認め、受け入れた時、この分別する思考を手放し、大我の光の中に入ることが出来るのです。

大我の光の中に入り、自分の過去の否定的なものの見方や愛情に欠けた行動などを自分自身が赦した時、安心立命を得、より偉大な自己のかわりを瞬時に手に入れることができるということです。自分を赦し、残っている否定的な感情的エネルギーを解放することで、自分の浄化された意識の中から、他の人たちを快く赦すことができるのです。

また自分を愛することは、自分を赦すことにより始まる。自分自身を赦した時、自分自身が尊いものであるということを受け入れることが出来る。自分達の価値に気づくことができないと、私たちの心の中に障壁をつくり、自分達が快く与える真の愛を行うことができなくなるといわれているのです。

愛は光の自分になった時その姿を現わす

愛とは、縦には神との繋がり、横には、小生命と小生命のつながり、というように、生命と生命が交流しあうことと言われていますが、何故私たちが円滑に実現できなかったのかというと、私たちが小我の想念でしか思考できなかったということでしょう。大我の光を取り戻すと、愛はその姿を現わすことを知るべきでしょう。このため世界平和の祈りや、人類即神也、神聖復活の等の印が降ろされたということでしょう。このことを認識し、日々大我の光に意識を集中していきたいものです。

これを極めていけば、私たちは無限なる光を引き寄せ、肉体界に身を置いたまま創造主の分身としての自覚を得、愛そのものの姿を現わしてゆくことになるのではないのでしょうか。

(付記)

宇宙神の分身としての意識を取り戻す

神聖復活の印により自覚めるということとはどういうことでしょうか。

この印の目的は、宇宙神の光を自分の肉体に降ろし、その光を自分と一体化し、自分を自覚めさせるとともに、この地上界の人類に放射し、人類の神聖復活を促すこととされています。

何故それが可能になったのかといえば、現在地球が1万3千年に一回起こる膨大なフォトン(光子)ベルト空域に突入している。次に2010年私たちは、究極の一筋の光を降ろすご神事を通して、自分の叡智のチャクラを開くこと成功しました。それにより私たちの頭上から少し離れたところまで流れてきている宇宙神の光を、印を組むことにより肉体にあるチャクラで受け止め、天と地を結び光の柱を形成でき、それを通して大我の光の中に入ることができるからと考えられます。

大我の光の中を行ったり来たりを繰り返すうち、私たちの過去の何万年もの体験を通じて得た智慧や能力が貯蔵されているDNAに光が注がれ、不必要なものは光に還元され、必要なもののみが輝きだしていると考えられます。

神聖復活の印を組んだ後、自分の周りがすべて光によって包まれているというところに気づく方もおられることでしょう。

宇宙神の分身としての意識は、無から有を生み出し、愛と大調和の世

界や光をも創造すると言われていますが、その意識を取り戻した瞬間だともいえるのではないのでしょうか。

こうした体験を重ねていくうち、その意識が根付いてくると、我即神也の意識は、このことではないかと確信するのではないのでしょうか。

宇宙神の愛により、宇宙神の分身としての意識を取り戻した今、この肉体界においてきた使命を果たし、地球と世界人類のアセンションに貢献する時なのです。

意識を光だけに集中し、光を引き寄せ、愛と調和の世界を創造していく時なのです。

そのためには、日々「素直に神様と想えるようになることと、何事も神様の愛の現われであると信するように思いを持ってゆくと」、「言葉を変えれば、光明思想を徹底し、すべてをプラス思考で取り組んでいくこと」でしょう。

しかしながら、この肉体生活を送っていくには、必ずしもすべてがよしとしていけないことがあることも事実でしょう。

その時、必要なのが笑いなのです。

昔から「笑う門には福来る」といわれていますが、これは眞理なので、苦しい時、辛い時ときこぞ、無理してでも、笑いとはしていかなくてはならないのでしょうか。笑いによって、幸運や成功を引き寄せた事例は、広く知られています。このような智慧を使い、日々の生活を充実していくのもひとつの方法でしょう。